—— 1964. Ibid. **14**: 51-70. 17) Wagner, W.H.Jr. and A.J. Sharp 1963. Science **142**: 1482-1484. 18) Yoroi, R. 1972. The Science Report of the Tokyo Kyoiku Daigaku Sec. B. **15**(225): 81-110.

* * * *

日本と中国に固有の種であるナカミシシランの配偶体を胞子（面河渓産）からの培養実験によって観察した。配偶体は不規則に分岐したリボン状の葉状体で，無性芽を生じることが特徴的である。胞子の発芽様式は百瀬博士の接線発芽を示す。また Nayar & Kaur によれば Vittaria-type を示す。前葉体の発達型については N. & K. の Kaulinia-type を示すが，コケシノブ科やヒメウラボシ科と似かよった初期前葉体形成の様式も観察した。配偶体の細胞は造卵器が形成される位置以外は一層である。造卵器・造精器の構造と外部形態は他の多くの薄のうシダ類と似かよっている。造精器の発生する位置は成熟度によって移動するが，これは無性芽の発生と関係がないことが判明した。無性芽は葉状体の縁や腹面に形成され，この種での発生様式は安定していると考えられるので，その過程を詳細に報告した。

□奥山春季：**採集検索 日本植物ハンドブック** pp. 783 八坂書房，東京 (1974). 本書は1953年に出た植物採集ハンドブックの増補版の形をとるが，内容的には全く一新されている。即ち独立した3部から成り，夫々が意味を持っているといってよい。第一部は地域別の植物で日本の各地方（小笠原と沖縄を除く）の主な採集地188についてそこでの注目すべき種名を網羅したが，特にそこをタイプロカリティとするものは変種品種までゴチックで明示し，さらに何か特徴的な植物の図を添え，また文献を挙げた。よくみると注意すべきものには文献や二三の注目すべき点も添記されていて，各地の植物相の概観を知り，特徴を掴むのにまことに打ってつけである。これは多年科学博物館にあって全国の同好家と接しておられた氏を以ってはじめてなし得た処であると思う。第二部は近似植物の検索で同属或は近似属の類似種間の識別を記したもので要を得ている。第三部は分類植物名鑑で，シダ類以上の日本に生ずる種名を，できる限り簡略に列記したもので，学名と和名とだけであるが必要に応じて変種，品種，分布，異名も附記されている。栽培種も帰化品も入っていて現在日本に見出される植物名を知るのに最もよい。抄録者のみるところではここが著者が最も力を入れたところであり，属の範囲は中庸で中々味がある。たゞ全体がＡＢＣの順であるのが惜しいところである。科学博物館を停年退職された記念としてまことにふさわしい出版物で，深く敬意を表するものである。（前川文夫）